

昭和三十四年十二月

高下古墳調査報告

(長崎県南高来郡国見町所在)

国見町教育委員会

高下こうげ古墳調査報告

小田富士雄

目次

一、序記	1
二、遺跡—古墳の立地と構造—	2
三、遭物—出土状況と種類—	4
四、結語	12

図版目次

挿図目次

第一遺跡(一)遺跡遠望	第1図	遺跡附近地形図(五万分之一「長洲」分載).....	2
第二遺跡(二)石室天井石引上作業	第2図	石室構造実測図(三〇分一) (小田富士雄、古田正隆、上田俊之実測、小田製図).....	4—5
第三遺跡(三)羨道部	第3図	石室内遺物出土状況実測図(二〇分一)(同右).....	4
第四遺跡(四)石室内部床面	第4図	金銅製飾金具実測図(三分二)(小田実測製図).....	6
第五遺物出土状況(一)A・C区	第5図	装身具類実測図(三分二)(同右).....	6
第六遺物出土状況(二)B区	第6図	刀子・鉄斧・刀装具実測図(三分二)(同右).....	8
第七遺物出土状況(三)A・C区	第7図	直刀実測図(四分一)(同右).....	8
第八遺物出土状況(四)D区	第8図	鉄鎌実測図(三分二)(同右).....	9
第九遺物(一)玉類	第9図	轡実測図(二分一)(同右).....	9
第一〇遺物(二)金銅製飾金具・空球・指輪	第10図	馬具部分品実測図(三分二)(同右).....	10
第一一遺物(三)金環・銀環	第11図	土器類実測図(二分一)(同右).....	11
第一二遺物(四)直刀細部	第12図	須恵器籠描記号拓影(二分一).....	11
	第13図	土器類実測図(二分一)(同右).....	11

一、序 記

長崎県下の古墳は近時対馬(1)、壱岐(2)、平戸(3)などの周辺離島には学術調査の手が延ばされているけれども、本土に於ける古墳の実態は知られていない。

島原半島でも古くは旧三会村景花園の弥生式遺跡(4)にはじまり、近時は北有馬村原山の支石墓(5)、深江村山ノ寺の縄文土器遺跡等の調査がすすめられて、にわかに注目されて来たが、古墳時代の様相は依然としてわからない。筆者は昭和三十二年十二月、島原市在住の古田正隆氏と共に国見町方面を踏査した際に高下古墳を見る機会をえた。越えて翌年十月、国見町長松尾貞明氏から古田氏を通じて高下古墳調査の依頼をうけることとなり、十三日から十七日まで調査を行つた。調査中は終始松尾町長をはじめ国見町教育委員会、町民有志の方々の御援助を賜り、無事終了出来たことは感謝に絶えない。また古田正隆、上田俊之氏には発掘から実測に至るまで御協力いただき調査の遗漏なきを期した。この他に地元高校生等の援助も忘れ難い(6)。

註 (1) 水野清一、樋口隆康、岡崎敬「対馬」昭和二十八年

(2) 学会対馬共同調査委員会「対馬の自然と文化」昭和二十九年

(3) 水野清一、岡崎敬「壱岐原の辻弥生式遺跡調査概報」(対馬の自然と文化所収)

(4) 京都大学平戸学術調査団「平戸学術調査報告」昭和二十六年

(5) 島田貞彦「甕棺内新出の玉類及布片等に就いて」(考古学雑誌二十一巻八号)昭和六年

(6) 文化財保護委員会「志登支石墓群」昭和三十一年

松尾禎作「北九州支石墓の研究」昭和三十二年

調査全般にわたつての事務、その後の遺物保存等については国見町教育委員会の岸力氏、荒木昭一氏に御尽力いただき、発掘調査には島原農業高校市川信愛氏、同校生徒諸君、島原高校国見分校諫見富士郎氏、金子賛氏、島原南高校堂崎分校伊達亮秀氏、松本一寛氏、更に稻田友一氏、本多洵子氏、島原観光協会荒木久美氏等の御援助をいただいた。記して謝意を表する。

二、遺跡 —古墳の立地と構造—

(國版第一—第四)

高下古墳は南高来郡国見町多比良字岩名丁ノ三五一番地(1)にある。一般には多比良下高下所在の古墳として知られているので高下古墳の名称をとつた。この地一帯は遠く雲仙岳から延びた広範な扇状台地の北端に当り、火山灰の降下堆積した土壤が分布する。遺跡に立てば北から東にかけて有明海をはるかに望める景勝地である。この近くでは他に二例の古墳が知られている。一は多比良字金山に在る金山古墳で昭和二十八年の開墾によつて湮滅したが人骨が採集保管されている(2)。他の一は湯江字平山に在る平山古墳で現在なお保存されている。両者共横穴式石室である。現在知られているのは高下古墳を加えて以上三



第1図 遺跡附近地形図(五万分之一「長洲」分載)
1高下古墳・2金山古墳・3平山古墳

入口方向	構造	所在地			地形
		高下名觀音小路	同	上	
ラ在口ノ如ニシルアヒリ、奥室今猶ナ存入扇室	本窟ノナリシモ東南	九尺	八尺	七尺	凡県谷道ヲ十ニ臨ム二町去ル南方
同上	叢生テ被外ヒ部然フ以竹土ニ木ヲ任下其平ヲ	八尺	四尺乃至六尺	六尺	同上
東	傾スニアハ大シジ、構造封ナテ、但い石材ニヨ材ニヨ概同	六尺	六尺	五尺	同上
東南	横ノノ如腕シ至下部倒巨隨上部益部ノアリ、縦尺以上ナ	九尺	一丈	六尺	同上

例にすぎないが、念の為に明治二十五年、当時の郡長金井俊行編纂の「南高来郡町村要覽」によれば、多比良村四所、湯江村一所、布津村二所の古墳所在があげられている。また、松尾貞明氏実父に当る村田貞範氏が明治年間に調査記録された「郡史資料第八号」に「多比良村石窟調査書」(3)があるが、これによれば、当時多比良村には古墳四所があり、町村要覽の記載と一致する。村田氏記録には四所の各古墳について詳細な記載と古墳写生図があるので、右に記録を掲げておこう。本表中「に」が金山古墳であるのは論を待たないが、高下附近には高下古墳を含めて三古墳が在つたこととなる。而して觀音小路なる地名

は高下古墳の近傍にあつて、往時、本古墳がこの地名を負うていたやも測りがたいので「い」、「ろ」二古墳に限定してよいであろう。今この二者を写生図でみれば「い」は封土あり立木が繁つてゐるが、「ろ」は石室が露呈して、傍に「觀音小路丁ノ三五一」と地番が註してある。後述する如く高下古墳露呈し、天井石が落下して、地番も一致する。表によつて検討すれば窟内法量、構造、入口方向等も一致しているので、この「ろ」古墳こそ高下古墳であることが知られる。かくして、明治末年迄は少く共石室は露呈していたが、天井石は落下しておらず、内部に入ることが出来たと考えられる。また、「い」「は」二古墳もこの後に湮滅したものである。

高下古墳は石室が露呈し、また天井石が落下して、竹木は繁り内部も土砂に埋もれて寄り難い現状であつた。封土も周囲を削りとられて原形を復することは出来ない。当初は我々も盜掘されたものと思つてその成果は期待出来なかつた。石室は全長六・三米あつて東南に開口する。三・三×二・八米の方形に近い奥室に巾一・六米、長さ二・四米、羨道が附設された单室横穴式石室墳である。西南側の奥室と羨道の壁石は石材一枚を立てて、各壁一枚は取去されている。その他の壁は各一枚石でたたまれ、奥室で二・四米、羨道で一・二米の高さをもち、これに奥室と両袖石上に各一枚の天井石を覆せたものである。従つて天井を複原すれば羨道、両袖石、奥室の順に重ね合せながら覆うことになる。石室内は羨道壁石の上面まで埋土が堆積していたが、土砂運出後、壁面に塗朱の痕跡が認められたので検討した結果、築造時には石室壁面全部に塗朱されていたことを知つた。羨道及び奥室の床面は一部盜掘されているが、大体に当初の構造をとどめている。奥室は奥壁から約一米手前にこれと平行して扁平な割石を立てて仕切り、更に東北壁より約一米離れてこれと平行に仕切石を立並べ、その末端は丁度袖石の端に接続する。壁面と仕切石の間は割石を敷きつめてある。また西南壁側にも同様な敷石があつて、袖石の端まで達しているので巾約一米に及ぶがこの区劃には仕切石が当初から附設されていない。以上の三区劃は遺物の出土状況と照合してみても明らかに被葬者を安置した屍床であつて、我々はこれを順にA区、B区、C区として処理した。従つて、両袖石の間、乃ちB、C区の間の通路をD区とする。D区は盜掘されているけれども本来敷石はなかつたようである。この通路入口に並ぶ若干の敷石は盜掘時に寄せられたもので、C区の一部掘りとられた敷石に当るのであろう。A、B区の仕切石は高さ二〇乃至三〇釐で、外側から見える部分は塗朱されている。本石室は所謂「コ」字形に屍床を配置した例で、三屍床附設の順序はA区、B区、C区であることが容易に察しられる。また、石室の立面に於いても殆んど周壁、天井を各一枚石で疊んでいて、当代の石室墳一般にみる如き栗石を使用して次第に内部に持送りながら高く穹窿状に構架する仕組みがとられない点も特異といふべきであろう。なお石室築造に使用された石材は角閃安山岩で近傍に産出する(4)。

註

- (1) 旧名称は南高来郡多比良町高下であるが、昭和三十二年多比良町、神代村、土黒村の三町村合併して国見町となつた。

- (2) これについては九州大学医学部解剖学教室金闕丈夫博士のもとで鑑別を経てゐる。

- (3) 松尾貞明氏の話によれば、村里貞範氏は大正三年に没していて、この石窟調査書は晩年に成つたものという。貴重な資料の閲覧を許容された松尾町長に謝意を表する。

- (4) 石質鑑定は九州大学理学部地質学教室の唐木田芳文氏に依頼した。

三、遺物 —出土状況と種類— (図版第五一第一二)

発掘がすすむにつれて羨道、奥室内には埋土と共に須恵器、中世の瓦質土器、近世陶器などの破片が多く発見されたがいざれも本石室墳の副葬品とは無関係である。古田氏によれば封土中から藏骨器なども発見されている由で、発掘品の中にも確かにそのようなものがある。封土を削り、或は周囲の耕作時に発見された遺物を石室内に投棄したものもかなりあると思われる。これら後世の遺物は本報告では取扱わないこととする。室内屍床に至るまで竹木の根が入りこんでいて、遺物も殆んど移動しているので、すべての副葬品について当初の配置を知ることは出来ない。以下A、B、C屍床、D区の順に出土状況の概要を記そう。

A区—西壁沿いに須恵器、刀子、馬具部分金具等が散乱した状況で発見された。中央部には金銅飾金具、金銅空球等があり、東壁附近に圭頭式、円頭式の鉄鏃があつた。奥壁沿いの西寄りに勾玉、管玉、小玉等のかたまつて発見されるところがあつて、被葬者の頭位が西南にあつたと思われる。仕切石寄りの方に稍空所ができるのでもう一体の被葬者も考えられるが確証はない。

B区—遺物は殆んど南半部にかたまつていて、須恵器、金鐸、鉄斧、金銅鐸がやはり乱された状態で発見された。東壁沿いに勾玉、丸玉、小玉等が密集して被葬者の頭位が東南にあつたことを示している。指輪はこの玉群より稍北にはずれていて被葬者の腕の位置にふさわしい。

C区—敷石の一部が盗掘によつてとり去られたが、幸い勾玉、管玉、切子玉等の位置は知ることができた。被葬者の頭位は北西である。A区仕切石沿いは轡、須恵器等がある。A区発見の馬具類は恐らくC区のものが落ちこんだものと考えられるので、馬具は本来C区のみに副葬されたのであろう。南側に丸玉少數の発見があるが、移動した可能性も強く、もう一体の被葬者を考えることは確証に乏しい。

D区—ここは被葬者は安置されず、A区仕切石前方に須恵器が並べおかれていたと考えられる。この区劃は盗掘にあつていて、入口寄りの須恵器や鉄鏃はいていないと思われる。B区被葬者に属する遺物である。D区は本来敷石はなかつたようである。

以上によつて、少く共三体の被葬者が安置され、二世代以上にわたる古墳の使用が考えられるので、当然遺物も時期の異なる副葬があつたことになる。しかし、副葬時の位置を著しく移動し散乱しているので、個々の遺物について全部を当初の所属屍床に帰納し、明快に分類することはできない。

×

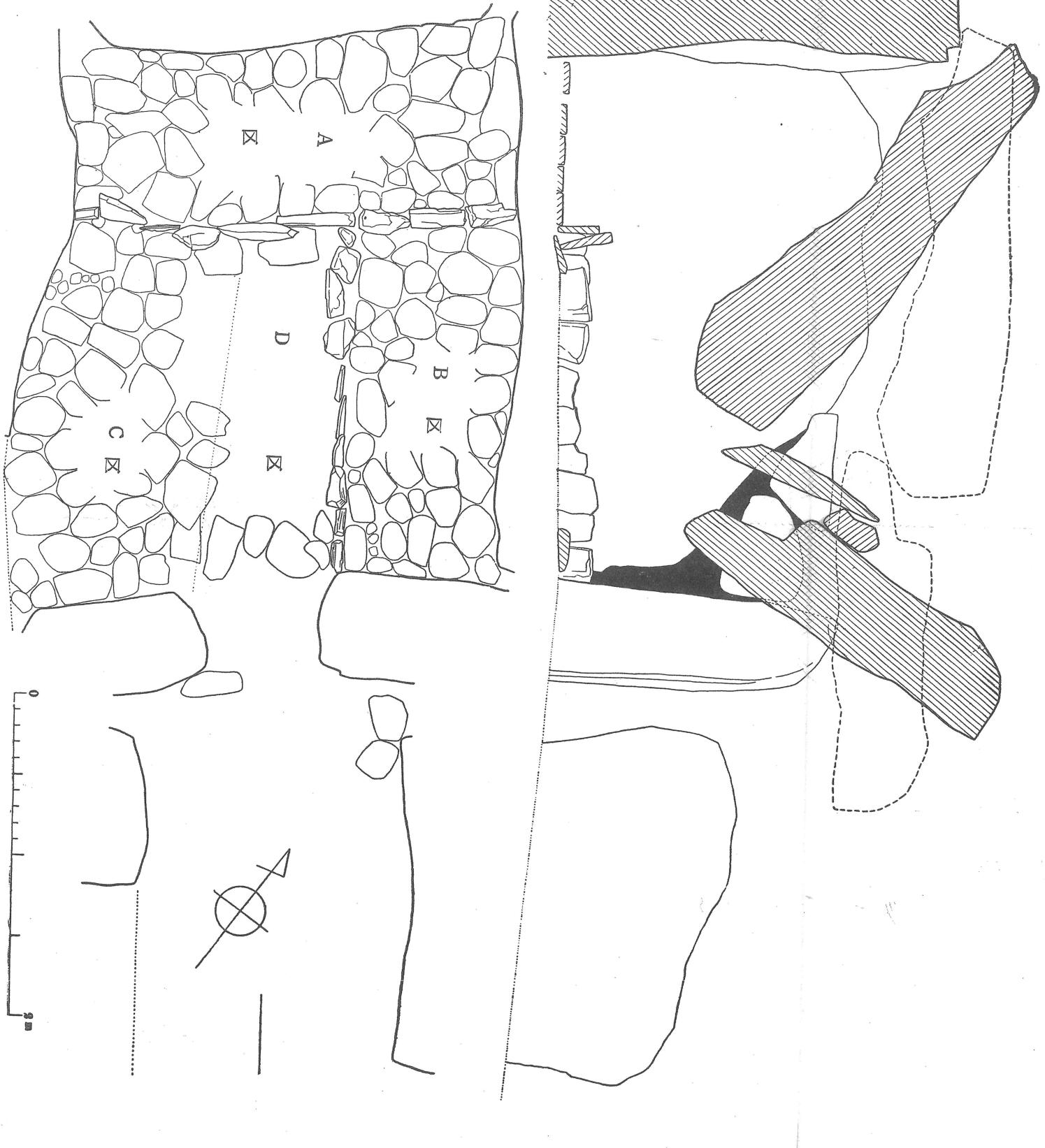
×

×

次に本古墳關係の出土遺物を整理して品目、数量を示せば、

(A) 装身具類

一 金銅製飾金具	破片一括
一 金銅製空球	二個
一 金銅製指輪	一個
一 玉	十五個分 百八十個



第2図 石室構造実測図 (30/1)



第3図 石室内遺物出土状況実測図 (1/20)

(B) 武具類
 一 鐵刀
 一 金銅製
 一 鐵製
 一 鞍尻金具
 一 鐸刀
 一 子斧

(C) 馬具類
 一 鐵直
 一 金銅製
 一 鐵製
 一 先形金具
 一 鐘錠
 三組二個十五個九個三個

(D) 土器類
 一 須恵器
 一 土師器
 十九個
 一個

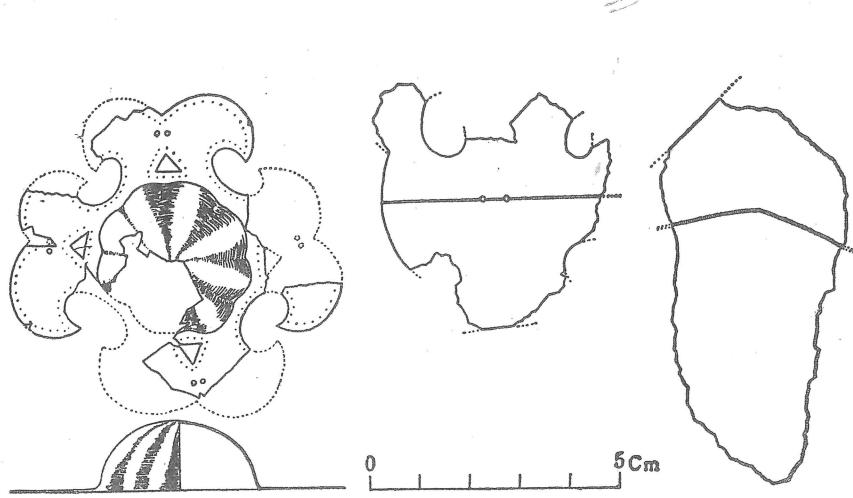
以下、各遺物について写真、実測図等でその全般を紹介し、必要な点のみを簡単に触れるにとどめる。

(A) 装身具類

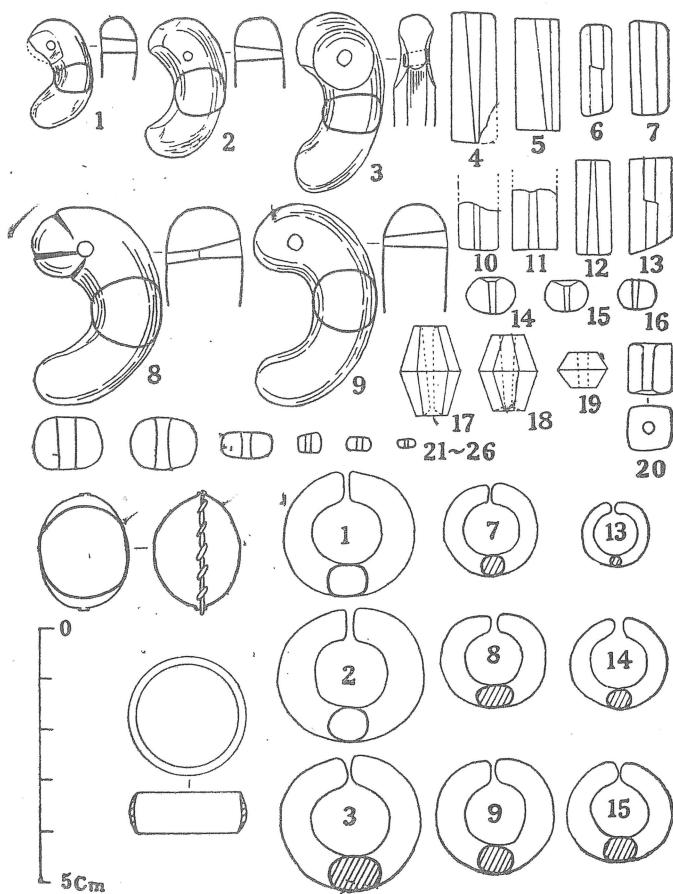
金銅製飾金具 (図版第一〇、第4図) 金銅薄板製で、破碎している為すべての形成は知りえない。中に八花形半球座の四周に反転する双脚板を附したものがいる。これは複原してみると、脚部の破片が多く、当初二例副葬されたらしい。脚部周辺に小点孔を連続しており、また双脚中央に三角孔と二個の小孔がある。この他にも屈曲する脚を附した平板、冠の前立に類するものなどがある。いずれもA区。

金銅製空球 (図版第一〇、第5図) 鋸鉤形をした金銅製品で、中空。両端に孔をあけて、中に麻糸をより合せた紐が残っていた。二個あつて対をなすので、恐らく結び紐の先端にとりつけられた飾球の一種であろう。A区。

金銅製指輪 (図版第一〇、第5図) 径二・三釐、幅八耗の金銅製。断面外脛らみを呈する。從来我が國古墳から指輪の発見されることは珍らしく、筑前冲ノ島、同大島の祭祀遺跡、筑後八女郡水原古墳等五個が知られている⁽¹⁾。南鮮新羅の古墳には屢々発見されていることが注目される。B区。
鏡 (図版第一一、第5図) 金銅製、銀銅製合せて十五個あり、一個(5)が破片である。一括して計測値を掲げておく。A区、C区の発見例が多いが、当初の位置はどうかはうたがわしい。計測値、材質、内部の空美等を検討して対をなすと考えられるのは、1と4、2と5、3と6、7と10、8と11、9と12である。



第4図 金銅製飾金具実測図 (2/3)



第5図 装身具類実測図 (2/3)

内部	材質	径	
空	銀	1 (A)	
空	銀	2 (A)	
実	銀	3 (A)	
空	銀	4 (A)	
空	銀	5 (C)	
実	銀	6 (C)	
実	銀	7 (A)	
実	金	8 (C)	
実	金	9 (C)	
実	金	10 (C)	
実	金	11 (C)	
実	銀	12 (D)	
実	金	13 (C)	
実	金	14 (B)	
実	金	15 (D)	

(単位: 梓)

玉（図版第九・第5図） 総数百八十個のうち、種類別統計、計測値等を各々表で示しておく。

種類(個数)	材質(個数)	挿図番号
勾玉五	ガ滑碧硬 ラス石玉玉	一一二
管玉八	ガラス メノウ 碧玉 破完 片形 五八四七三	一一一
丸玉一四四	ガラス メノウ 碧玉 破完 片形 一二五	一一一
切子玉二	ガラス 水晶	一一一
算盤玉一	ガラス	一一一
四角玉一九	ガラス	一一一
小玉一九	ガラス	一一一

勾玉計測表 (単位纏)

挿図番号	全長	厚	材質	色調	出土区	穿孔法
9 8 3 2 1	二・二	二・二	ガラス	鮮綠色	一	24 26
四・三・〇・九	三・六	一・八	ガラス	暗綠色	一	20
三・二・〇・一	二・六	一・〇	ガラス	青灰色	二	19
二・一・四・八	二・〇	一・六	ガラス	白色	一	17 18
碧玉硬玉	碧玉硬玉	碧玉硬玉	ガラス	深綠色	二	2114 2316
滑玉	滑玉	滑玉	ガラス	青色	一	7 116
算盤玉	算盤玉	算盤玉	ガラス	灰色	一	104 12
四角玉	四角玉	四角玉	ガラス	白色	一	13 13
小玉	小玉	小玉	ガラス	白色	一	

水晶及瑪瑙製玉計測表 (単位纏)

算盤玉	切玉	(丸ノ玉)	種類	挿図番号
19	18 17	16 15 14	丸ノ玉	一一一
○・七五	一・一・八	○○○○六六七	全長	一・一・九
一・〇	一・一・二	○○○一八五	最大径	一・一・九
透明	透明	淡濃淡褐色	色調	一・一・九
C	C C	C C C	出土区	一・一・九
片方	片片	片片片	穿孔法	一・一・九

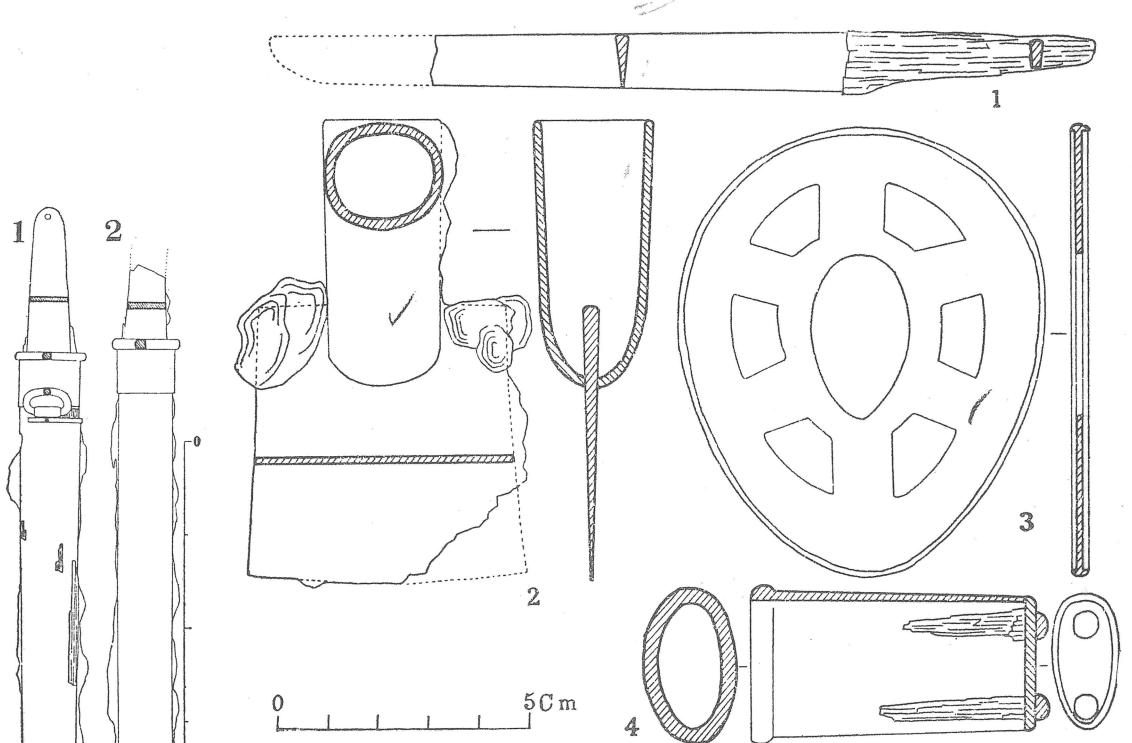
13 12 11 10 7 6 5 4	挿図番号	全長	径	材質	色調	出土区	穿孔法
一一一〇一	一一一	二・六	一・一・九	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
一・一・九	一・一・九	二・六	一・一・九	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
○○○○○○○○	○○○○○○○○	一・一・九	一・一・九	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
九七九八八七九九	九七九八八七九九	一・一・九	一・一・九	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	碧玉	一・一・九	一・一・九
灰深	深	深	深	深	深	一・一・九	一・一・九
青綠	綠	綠	綠	綠	綠	一・一・九	一・一・九
色	色	色	色	色	色	一・一・九	一・一・九
C C C C A A A A	C C C C A A A A	一・一・九	一・一・九	一・一・九	一・一・九	一・一・九	一・一・九
両片	片	片	片	片	片	一・一・九	一・一・九
方方	方	方	方	方	方	一・一・九	一・一・九

ガラス製丸玉(21~23)及び小玉(24~26)は各区にわたつてみられたが、特にB区のものは凡て当初の位置にあつたと考えられる。丸玉は单綠色半透明のもの完形七八、破片五四、藍色のもの九あつて、径一・四纏から一纏程度まで大小ある。多くは風化して真珠色に変じている。小玉は藍色十一、青色四、浅青色四あつて、径五纏乃至三纏に及ぶ。C区発見のガラス製四角玉(20)は浅青色を帶びた透明なもので、形も珍らしい(2)。長さ一纏、径九纏。

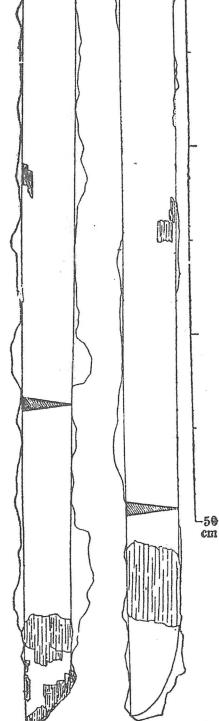
(B) 武具類

鉄斧(第6図2)円筒形笠部に刃先の稍開いた鉄板を挿入した有肩鉄斧である。這種遺物は類品に乏しい。着柄された形跡はない。B区。

刀子(第6図1)身の先方を欠いでいるが、全長十五纏以上に及ぶであろう。身は長く、巾一纏、木柄が装着している。A区。



第6図 刀子・鉄斧・刀装具実測図 (2/3)



第7図 直刀実測図

(1/4)

鉄鎌 (第8図) 殆んどA、D区に散乱しているが、すべて当初のままですることは出来ない。次の六種に分類できる⁽³⁾。

片丸造棘鎌被鑿箭式	四本 (1・2)
方頭広根斧箭式	一本 (3)
変形飛燕形式	二本 (4・5)
圭頭広根斧箭式	一本 (6)
円頭広根斧箭式	一本 (7)
片刃箭式	A区 (8)

3は身に麻布が附着し、茎に樹皮を巻く。4、5は鹿角柄で糸巻様の痕跡がある。

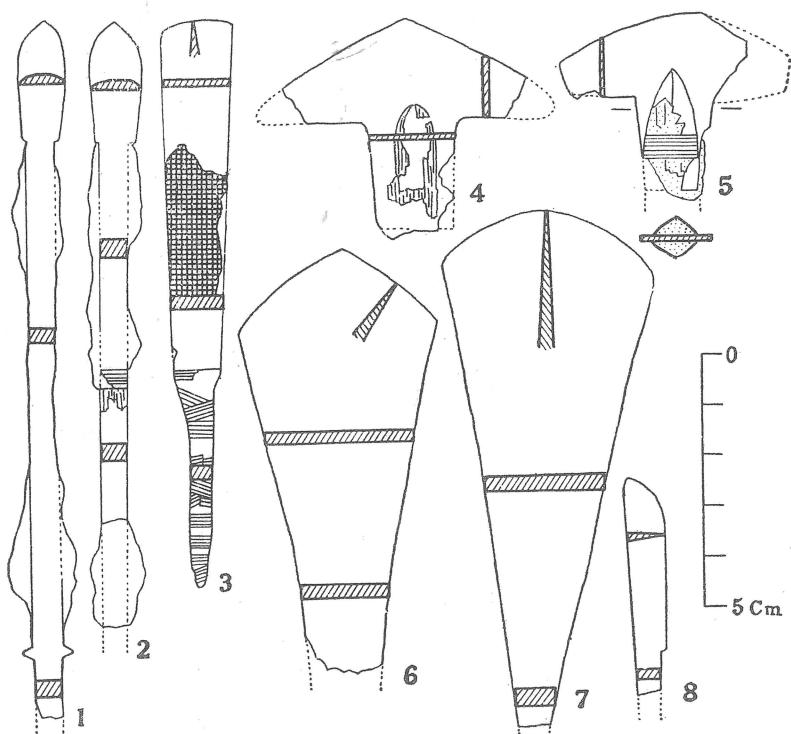
		(単位 番)				
2	1	全長	身長	身巾	茎長	茎巾
六九・八	七三・一	六四・八	二・八	七・七	二・一	○・七
(+)	六五・三		二・八	三・九(+)		目釘孔一
				一・九		
				○・九		

金銅製鐔 (第6図3) 倒卵形六窓の鐔で長さ八・九畳、最大巾七・三畳、厚み一・五耗ある。周縁は厚み三・五耗で蒲鉾形の断面をしている。B区。 鉄製鞘尻金具 (第6図4) 随凹形円筒の一端に鉄板をあててふさぎ、木製鞘尻に挿入して釘で留めたもの。長さ五・六畳。A区。

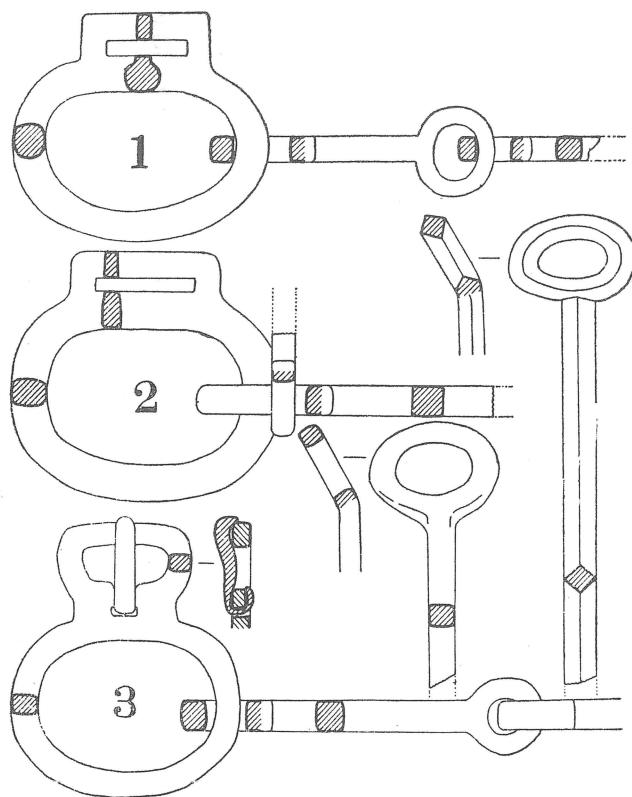
直刀 (図版第一二、第7図) 二本共相似た長さと形成のもので、木製鞘に入っていたらしい。共に鞘口に鉄地銀張の鐔と鉗をもつていて、1では銀銅製の佩用環の附属しているのが注目される。D区。

(C) 馬 具 類

轡 (第9図) 完形でないが三組あつたらしい。1、2は似た造りで、鉄製素鏡鏡板の上部に革帶を通す施設がある。3は上部が鉸具になつていて、鏡板と引手はいずれも喰に直結している。引手は断面隅丸方形と菱形の二種あり、先端の鐸が屈曲する。古墳発見例通有の轡である。B区。
辻金物 (第10図1) 鉄製半球座四脚式で、各二個の銅地銀張鉢がある。半球座の中央に銀銅製円板をのせ、同製の鉢が貫通する。A区。
帶先金具 (第10図2・4~6) 革帶の先端に使用されたもので四種の形態がある。いずれも鉄地銀張。

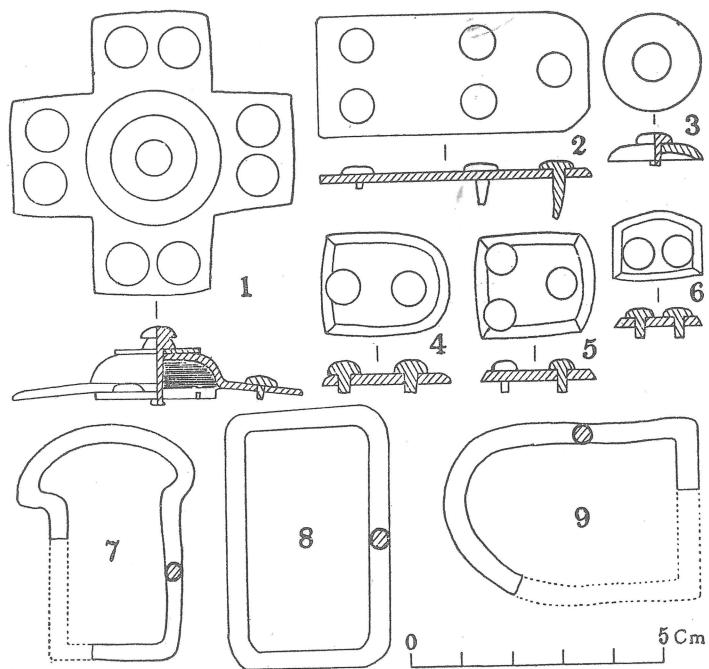


第8図 鉄 鏡 実 測 図 (2/3)



第9図 轡 実 測 図 (1/2)

が著しい為、本来その区劃内に副葬されていたかどうか疑点がある。坏は身底部に箇描記号の刻まれたものがある。青鼠色の堅緻な焼きで、胎土に石英の粒子を含む。A区発見の坏蓋には擬宝珠のつまみがあつて、副葬時期の新しいものがあることを暗示している。この蓋はA区の身4、5とセットをなすようである。蓋にはA区の如きつまみあるもの(一類)と、B、C、D区の如きつまみのないもの(二類)の二種、身にはA-4、5、B-2、C-2の如きもの(一類)、A-3、C-1、3、D-5、6の如きもの(二類)、D-7、8の如きもの(三類)の三種に大別出来る。



第10図 馬具部分品実測図 (2/3)

円形鉢(第10図3) 径二種の鉄地銀張製で、やはり革帶の接合に使用された金具と思われる。計九個あつてA、B区に発見された。

尾鏡(第10図7~9) 形態の複原できるもの三個がある。いずれも鉄製で断面丸く、形態も異なる。刺金を欠いているが馬具の部分品である。7はA区、8、9はD区発見。

(D) 土器類
須恵器(第11~13図) 一部に破片もあるが大部分は完形品で、坏(蓋と身)、平瓶、壺がある。各区から発見されているが、A区、B区のものは特に散乱した状況

坏蓋計測表

D区	C区	B区	A区	番号		
				径	高	
3	1	4	1	2	1	一一・一
一〇・七	一〇・七	一〇・五	?	一一・七	三・四	三・五

(単位 程)

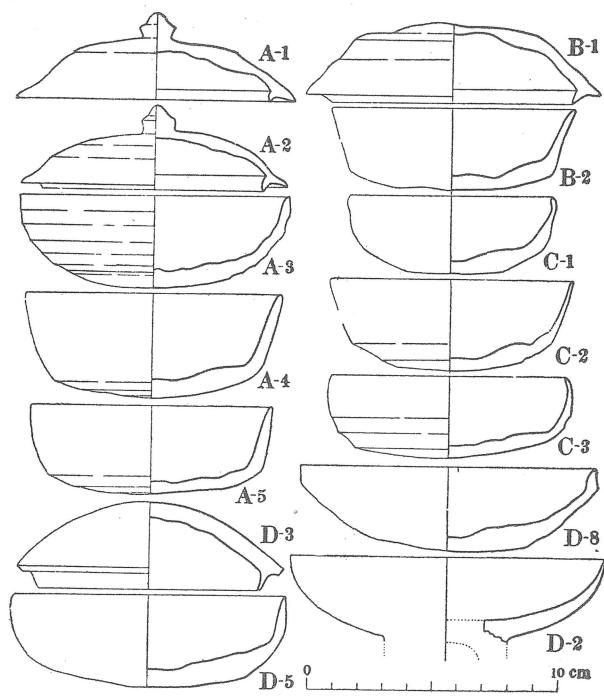
四 類	三 類	二 類	一 類	挿 図 番 号		個 数	発 見 区	全 長	巾	厚	銀 数
				2	8	2					
			A・D	五・四	二・四	○・一五					五
				二・五	二・〇	○・二					二
				二・四	二・一	○・一					三
			A	A	A						二
			一・八	一・三	○・一						

(単位 程)

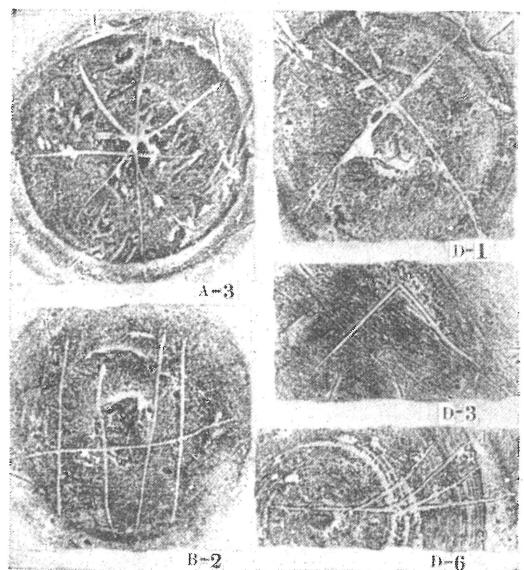
坏身計測表

D 区	C 区	B 区	A 区	
8 7 6 5	3 2 1	2	5 4 3	番号
一一一 一二三 四〇〇 八	九九八 九 七一	九 七	九〇〇 六二七	径
三 四 三〇	三 三 六一	三 三	三 四 六二七	高
?	七			

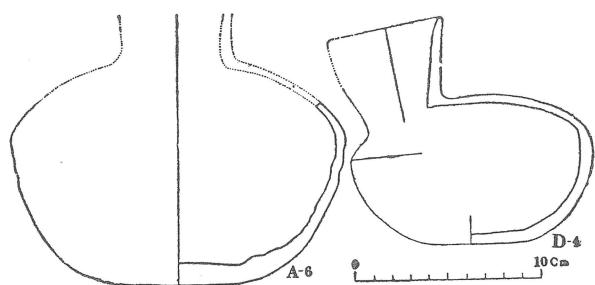
(単位 種)



第11図 土器類実測図 (一) (1/3)



第12図 須恵器窓描記号拓影 (1/2)



第13図 土器類実測図 (二) (1/4)

平瓶（D-4）は胴径十四粁、高さ十二粁で、肩部に稜がみえはじめている。黄灰色の稍柔かな焼きである。壺（A-6）は灰黒色の堅い焼きで、表面に緑色釉が流れている。胴径十八粁で上半部がないけれども、内部底に径六粁余の緑色釉がみられ、焼成時の灰被りによるものと思われる所以、径六粁余の長頸壺であろうと推定した。

土師器（第11図D-2）径十二・五粁の高环上部一個がある。稍柔かな焼成で胎土良く、研磨して内外面を塗朱している。

註

(1) 宗像神社復興期成会「沖ノ島」一二六頁 昭和三十三年

(2) 類品は筑前福岡市平尾の八反田古墳出土例がある。昭和三十二年九州大学考古学教室調査。

(3) 鉄鏃の分類名称は後藤守一氏に従つた。「上古時代鉄鏃の年代研究」（日本古代文化研究所収）昭和十七年

四、結語

高下古墳は調査前の予想を裏切つて石室の構造を凡そ復原することができ、また遺物も盗掘を経ているにも拘らず、大部分を残していく古墳の年代を知る手掛りができた。

先ず石室の構造についてみれば、横口式单室で床面は仕切石をもつて三床に区劃され、壁面を塗朱したもので、これが九州地方の後期古墳でも比較的古い時期に現われる様相であることが注目される。近時筆者等の調査した佐賀県横田下古墳⁽¹⁾、大分県法恩寺四号古墳⁽²⁾などに最も密接な類縁関係をみると出来る。這種古墳の早い例としては五世紀中葉に比定される佐賀県横田下古墳⁽³⁾があり、これにつづいて佐賀県では閔行丸古墳⁽¹⁾、目達原の大塚吉墳⁽⁴⁾、基山の上野古墳⁽⁵⁾などがある。また本古墳の如き仕切石とは稍異なるが、障壁をもつて二乃至三区に分つ手法のものは熊本県下に多い。例えば千金甲一号墳⁽⁶⁾、大鼠藏古墳⁽⁶⁾、日奈久町古墳⁽⁶⁾、稻荷山古墳⁽⁷⁾等がある。これらの中には壁面のせり持ちがさして認められないものもあつて、高下古墳の石室断面に通ずる点をもち、高下古墳の石室系統をたどることができよう。また以上の諸古墳は更に副葬品と照合してみても、凡そ六世紀中葉を下らない頃に編年される。このように考えてくれば高下古墳築造の年代はおそらくとも六世紀中葉頃に比定されてよいと思われる。遺物においても金銅製飾金具、指輪、鉄斧等年代的にも無理のない資料があり、またこれらが五世紀後半から六世紀にかけての南朝鮮の古墳遺物にみられる点も注意しておかねばならない。勾玉、管玉類にも古式の特性が認められる。しかしながら、一方では馬具、須恵器、鐸、鐸、鐵鏃の一部等には明らかに六世紀後半に盛行する特性が認められる。追葬が確認されておるのであるから、当然このような現象もあるべきで、むしろこれによつて本古墳被葬者の下限年時を決定すべきであろう。特に顯著な須恵器についてみれば、壺の蓋一類、身一類はセットをなすべく、六世紀も末期近くに盛行するもので、壺二、三類とは区別できるであろう。この際、大阪府大籠古墳⁽⁸⁾の須恵器第三群中に本古墳の一類壺と類似し、やはり追葬時の資料とされているのが想起される。乃ち、本古墳の下限を六世紀末頃に求めてよいであろう。

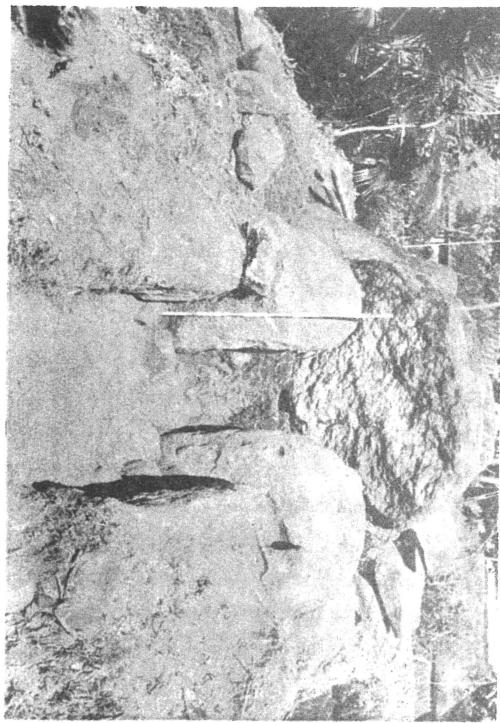
以上、遺跡、遺物から帰納して高下古墳の年代を推定したが、結局、この古墳は有明海を挟んで肥前、肥後方面に類似例をたどることができ、これがまた当地方古墳文化の性格をも規定すると考えられる。

末尾ながら高下古墳が長崎県下に占める位置は大きく、調査後、長崎県指定史跡として保存されるに至つたのはひとり筆者のみの喜びにとどまらないであろう。記して関係者の御努力に謝意を表する。

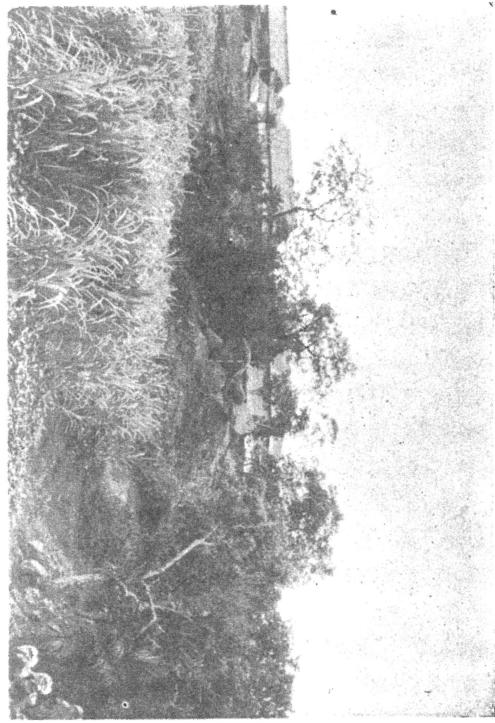
註

- (8) (7) (6) (5) (4) (3) (2) (1)
渡辺正氣「佐賀市閔行丸古墳」（佐賀県文化財調査報告書第七輯）昭和三十三年
鏡山猛・賀川光夫・小田富士雄「大分県日田市法恩寺古墳」昭和三十四年
松尾禎作「横田下古墳」（佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第十輯）昭和三十六年
松尾禎作「目達原古墳群調査報告」（佐賀県史跡名勝天然記念物調査報告書第九輯）昭和二十五年
鏡山猛「基山上野古墳」（佐賀県文化財調査報告書第三輯）昭和二十九年
浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける裝飾ある古墳及横穴」（京都大学考古学研究報告第一冊）大正六年
樋口隆康「九州古墳墓の性格」（史林三十八卷三号）昭和三十年
小林行雄・榎崎彰一「金山古墳および大籠古墳の調査」（大阪府文化財調査報告書第二輯）昭和二十八年

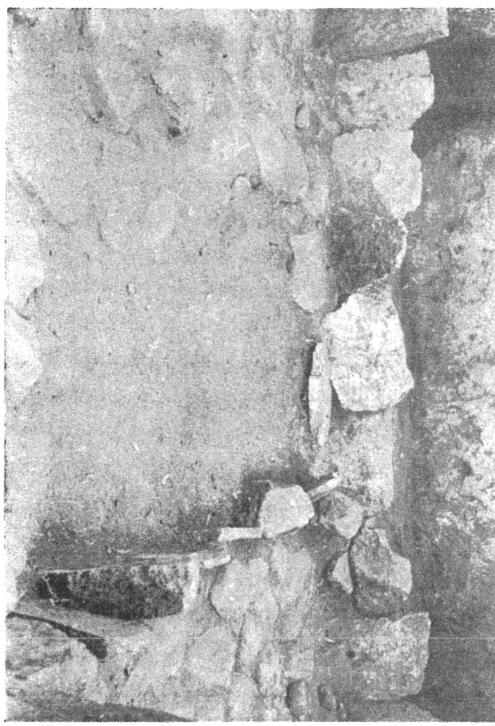
(三) 羨道部



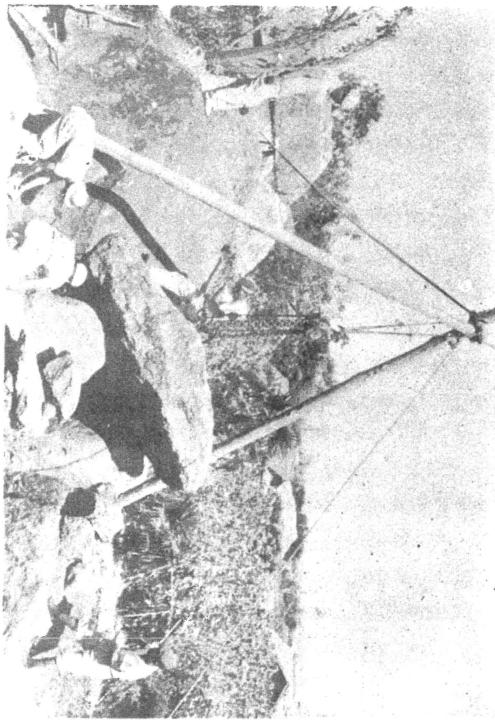
(一) 遺跡遠望



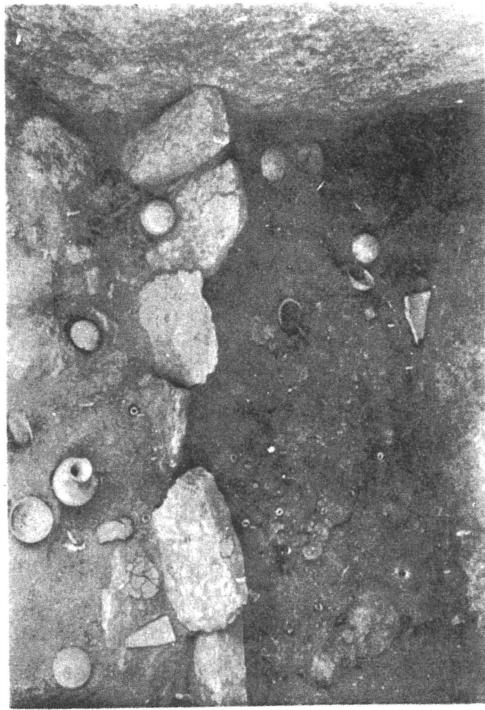
(四) 石室内部床面



(二) 石室天井石引上作業



(七) A・C 区



(五) A 区

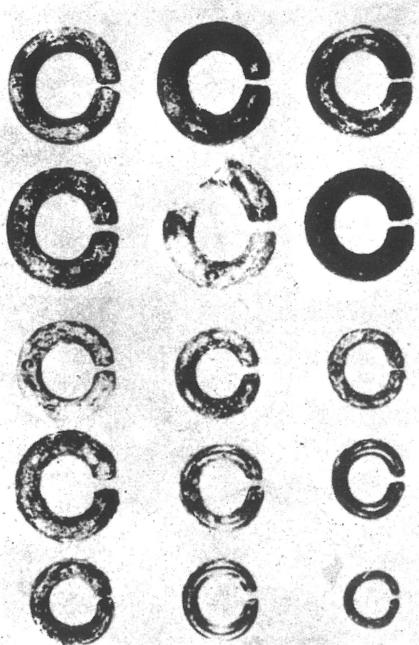


(八) D 区

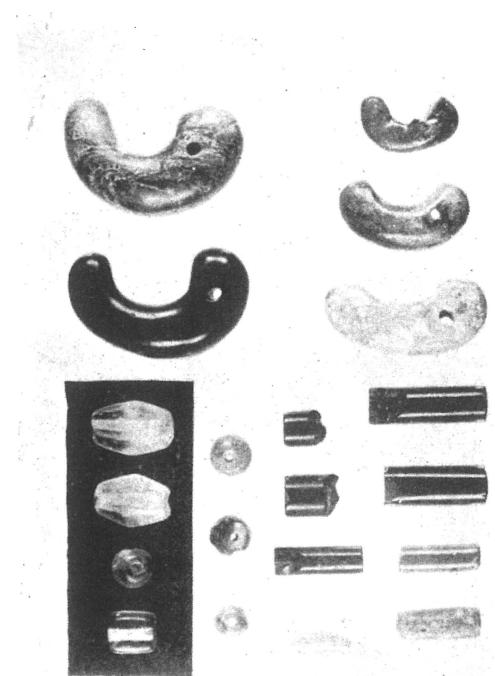


(六) B 区

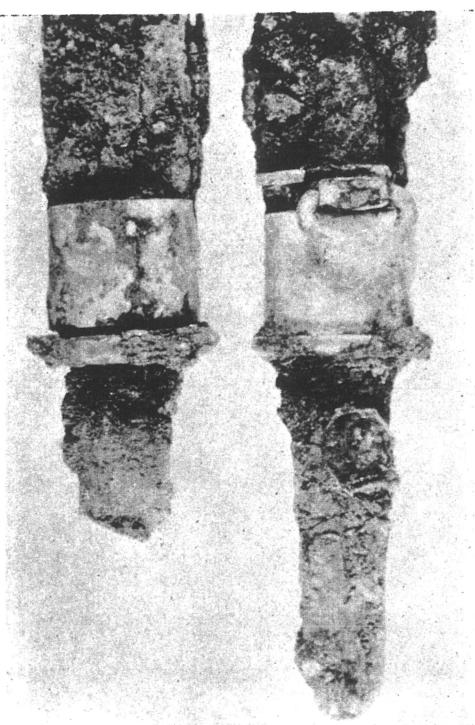




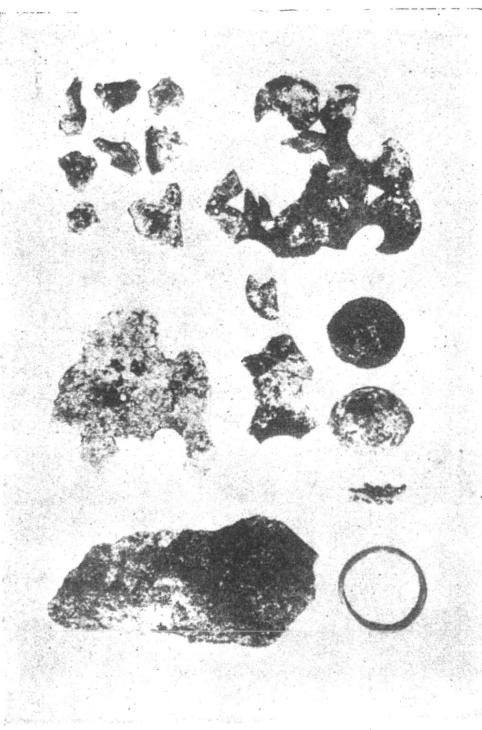
(一一) 金 錶・銀 錶



(九) 玉 類



(一二) 直 刀 細 部



(一〇) 金銅製飾金具・空球・指輪

